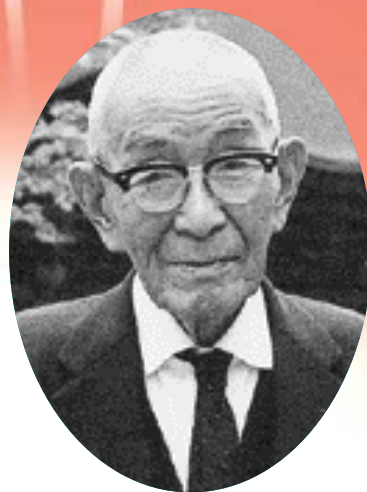


「多くの人々にこころの安らぎを」

しんらん
親鸞の研究者

うめはら しんりゅう
梅原 眞隆



そぼ
祖母から学んだこと

「眞隆、どうしてお経のお稽古をしないのですか」
「だって、お経が難しくて、いやなもの」

梅原眞隆さんは、お寺に生まれたのですが、お経を習うのが嫌いでした。それで今日も、こっそり庭に出て遊んでいたのです。

お祖母さんは、そんな眞隆さんに、やわらかな調子で話し始めました。

「昔むかし、子馬がたくさんまぐさ(わらや干草)を背負わされたので、不平を言いました。そして、暴れてまぐさをふり落として帰りました。そのまぐさは、子馬の食料であったそうなの…。このお話の意味が分かりますか」

お祖母さんは、将来のことを考えて、今、やるべきことをしっかりとやるのが大切だと教えたのです。眞隆さんは、仕方なくうなずき、お経の稽古を始め



病気をして、初めて分かった。
生きているというのは
何とすばらしいことなんだろう！
この先、私は清らかな心で
生きるすばらしさを伝えていこう。

眞隆さんは、『歎異抄』に大きな影響を受けたんだって。どういことかな？

眞隆さんは、その親鸞聖人の残した言葉を研究し、今の人々にも分かりやすいように伝えたんですね。

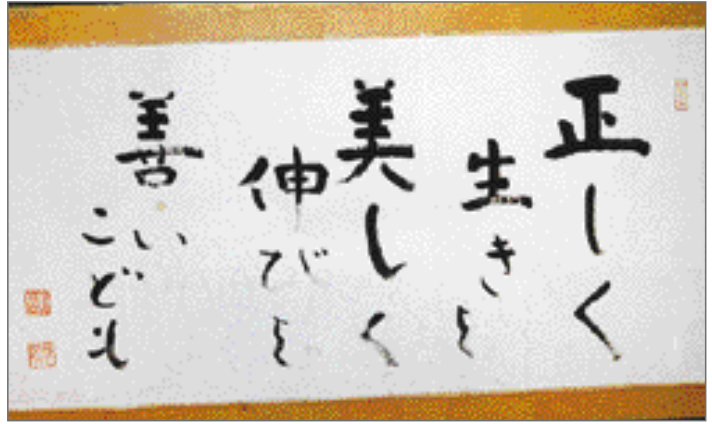
親鸞聖人という人を知っているかな？ 今から800年ほど前に、心のありかたを説いた人だよ。



4 いのちとところをはぐくもう

梅原真隆さんの三二年表

西暦	年齢	
1885年		上新川郡寺家村(現在の滑川市)の専長寺に生まれる
1903年	18歳	東京を目指して家出するが、小丸山別院の夫人にさとされる
1912年	27歳	京都の仏教大学(現在の龍谷大学)本科を卒業して、考究院(大学院)に進む
1919年	34歳	仏教大学の教授になる
1930年	45歳	「顕真学苑」を創設する
1937年	52歳	西本願寺の「勤学」に任命される
1947年	62歳	参議院議員になる
1957年	72歳	富山大学第3代学長に迎えられる
1966年	80歳	亡くなる



真隆さんから私たちへのメッセージです。(上市町立旧白萩東部小学校所蔵)

るのでした。

また、お祖母さんは、真隆さんを寝かしつけながら、美しい浄土(仏さまの国)や仏さまの様子を話し、口ぐせのように、こう言い聞かせたのです。

「偉い人になるよりも、仏さまに認められるようなありがたい人になってね」

家出と小丸山の一夜

もう一度、東京で勉強したい

いくつもの学校を転々とし、福井第二仏教中学(現在の北陸高校)で学んでいた真隆さんは、もう一度

東京の学校で勉強したいと考えていました。

そして、とうとう師走の雪の降りしきる日、友達二人と一緒に、お金も持たず、徒歩で東京へ向かいました。

しかし、夜になって雪も深くなり、泊まる宿もない3人は、困り果てました。そして、ようやく小丸山別院(現在の新潟県上越市)というお寺を見つけ、一晩休ませてもらうことになったのです。

「この雪の中、あなたがたは、どこへ行くつもりだったのですか」

「私たちは、東京へ行こうと思っているのです」

「え、東京? ご両親は、知っておられるのですか」

「いいえ、3人で決めて、ここまで歩いて参りました」

「それでは、ご両親は今ごろ、どんなに心

配しておいででしょう。こんな無茶なことをしてはいけませんよ。あなたがたは、まず中学でしっかり勉強して立派なお坊さんになり、ご両親を安心させてあげなさい」

小丸山別院の夫人にやさしくさとされ、3人はうなだれました。

「ここは昔、親鸞聖人が、京の都を追われてお住まいになったところです。どうかこれをご縁に、立派なお坊さんになって、もう一度来てくださいね」

真隆さんは血氣さかんな若者でしたが、夫人のやさしい言葉を聞いて、しだいに涙がこみ上げてきました。そして、夫人の言葉に素直に従ったのです。

「ここは昔、親鸞聖人が、京の都を追われてお住まいになったところ...」



家出のときの様子。

(滑川市立西部小学校4年 大浦由莉さん)



真隆さんの短歌

真隆さんは、たくさんのはらしい短歌をつくり、多くの歌集を残しています。

ふるさとや 鷺なげば 祖母上に

経ならひにし 稚児の日おもふ

(ふるさとに鷺の声を聞くと、お祖母さまにお経を習った幼い日々のが、思い出されるなあ)

家出して まよふ旅路や 小丸山

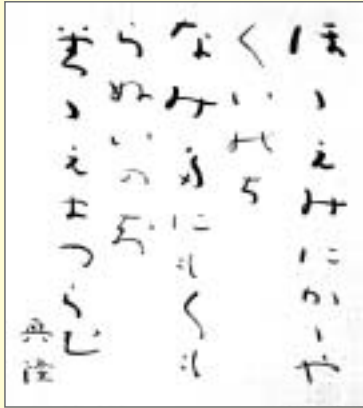
祖師の冥加に 涙こぼれし

(家を出して、迷った末にたどり着いた小丸山で得た、温かいお導きに涙がこぼれました)

うらわかき 身は病みふして 頬つたふ

涙をぬぐふ 夜半の病室

(まだ若いのに、病気になってしまった。夜の病室で、頬をつたう涙をそっとふいている)



真隆さんの歌「ほほえみに かかやくいのち なみだにも くもらぬ いのち たたえまつらむ」(うれしいことや悲しいことなど、さまざまなことがあっても、生きているということはすばらしい)

『歎異抄』との出会い

中学を最優秀の成績で卒業した真隆さんは、仏教大学(現在の龍谷大学)へ進みました。しかし、入学してまもなく、肺の病気(結核)にかかってしまいました。

当時、その病気は治る見込みがほとんどないと言われており、真隆さんは、絶望のどん底に突き落とされたような思いがしました。

ふるさとへ帰って療養することになった真隆さんは、一人突き放された思いで、何日も何日も浜辺の松林をさまよいました。

砂浜に打ち寄せる波は無限なのに、ぼくのいのちは終わってしまう。

真隆さんは、自分の死の前に、絶望感で押しつぶされそうでした。

そんな時、親鸞聖人の言葉を伝えた『歎異抄』を思い出し、古本屋で買ってあつたその本を何度も読み返しました。

そして、その中にある「念仏は、義なきをもつて義とす(はからいのないのが、一番よいはからいである)」という言葉にぶつかりました。

その言葉は、すでに知っていたはずなのに、新しい力をもって真隆さんに迫ってきました。

ああ、生きているということは、それだけでありがたいことなのだ。ぼくは今までいるいるなことにとらわれすぎていたのだ!

真隆さんは、自分が自分以外の大きな力によって生かされていることに、気がついたのです。真隆さ



滑川市立西部小学校4年生のお友達が、真隆さんの生まれ育った専長寺(滑川市)を訪問しました。



真隆さんは京都に顕真学苑を創設し、親鸞の研究に取り組みました。



真隆さんのエピソード : 真隆さんのもとには、全国各地からたくさんのお便りが寄せられました。真隆さんは、届いた手紙やはがきには、その日のうちに返事を書くことに決めていて、その習慣は亡くなるまで続けました。

子どもたちの感想

滑川市立西部小学校4年生のお友達の感想です。

真隆さんのことを勉強して、少し真隆さんのことがわかったような気がした。日本全国や、遠い海外まで、浄土真宗を布教されるなんて、すごい人だと思っ

(中田有香さん)

全国に教えを広めることは、すごいことだと思う。その当時、汽車でまわられたと思うから、一週間くらいかかったんじゃないかな。大変だっただろうな。

(大浦由利さん)

お寺の床の間に真隆さんの肖像画がかけられていたよ。びっくりした。やっぱりえらい人なんだね。真隆さんのことがいろいろ分かって、うれしかった。

(三浦南帆子さん)

私たちの近くに、こんなにえらい人がおられたなんて、知らなかった。真隆さんは、たくさんお仕事をしたんだね。

(芝田文香さん)

真隆さんのお寺は、とても広くてすごかったよ。こんな大きなお寺に住んでおられたんだね。まだ亡くなっておられなかったら、会ってみたらいいな。

(山本麻衣さん)

真隆さんは、いつも人のために一生懸命つくされた人だな。真隆さんは、きつとすごい人だと思う。

(伊藤文さん)

真隆さんのことをいっぱい教えてもらったよ。真隆さんは、夜遅くまで働いて人のために尽くされたそう

だ。どうして、そこまで人のためにになりたいと思うことができたんだろう。

(高田優花さん)

んは、気持ちがあつと楽になるのを感じました。

生きるよろこびを伝える

心に光を得たおかげでしょうか。真隆さんの病気は、次第に良くなりました。

真隆さんは、今まで以上に学問に取り組みました。そして、大学や大学院を卒業した後は、大学の教授となり、中国仏教史や日本仏教史などの講義を担当するほどになりました。

真隆さんの取り組んだ学問は、あの『歎異抄』などにもとづいた親鸞の研究でした。

「親鸞聖人の教えを広めるためには、現代の生活に合ったやりかたでなければ…」

そう考えた真隆さんは、京都に「顕真学苑」を創設し、親鸞の教えを自由に研究し、分かりやすく人々に広めました。

そのほか、参議院議員や富山大学第3代学長として、さまざまな方面に力を注ぎました。

それらの活動を通して、真隆さんが伝えたかったこと。

それは、親鸞から学んだ「生かされていることに気づくすばらしさ」でした。



真隆さんが発行した本の数々。



古希を祝ってつくられた真隆さんの胸像。

真隆さんは、親鸞研究の本を200冊以上も出版したんだ。



親鸞聖人の教えを広めるために、中国やカナダ、アメリカなどにも出かけに行ったんだって。



「今、生きている」ということを、改めて考えてみたくなりました。



梅原真隆さんは、心の豊かさに注目した人でした。次のページで紹介する稲塚権次郎さんは、いのちを支える作物の研究をした人です。